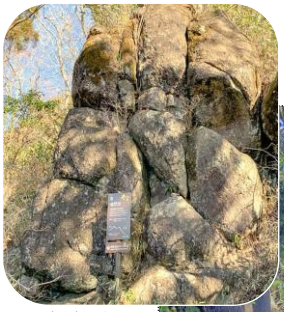
Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

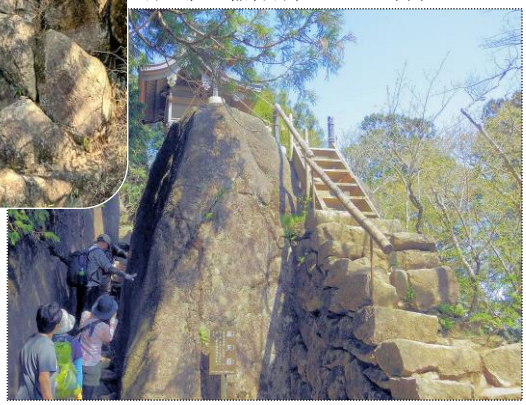
第１７４号　　2024（令和６）年１月２３日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス



高天原　北先生が逆立ちをされた巨岩で、その上には天照大神を祀る稲村神社がある（下）



横面大黒（裏面大黒）　大きな袋を背負った大黒様の後ろ姿のように見える（上）

筑波登山　３

暴風雨の中、五軒茶屋で一夜を明かした土中生一行は、男体、女体の山頂を目指します。山頂は雲の海。その絶景に 20 余名は、「恍として一語なし」。その景に名残を惜しみながらも下山。筑波山神社近く東山の宿屋塚田屋で朝食を済ませ、真鍋台の校舎へと帰路を急ぎました。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、【　　】は筆者による注記で、筑波山登山ルートを進修同窓会ＨＰの『月刊 Acanthus』第 174 号３頁に掲載しています。

また、高田保については、本紙第 18 号と第 20 号とに既述しています。

筑波登山【1911［明治44］年3月発行『進修第14号』所収】

三年　高田　保【中12回】

五

先づ男体山へ登る。雲たゞ漠々【ばくばく　果てしのないさま】。離れ小島にとり残された感がする。新ロビンソンクルーソーは、山の上で実現せられたのだ。観測所(注1)には若い人が居た。

女体に向ふ。

山の上の秋は早かつた。すでに黄ばみ果てた山毛欅【ブナ】の林も雲霧の中に美しく、その下生ひ茂つた熊笹の中には、咲き後れた女郎花【オミナェシ】が風情ありげに立つて居る。

しばらく平らな道を行くと、やがて爪先上りとなるのだ。道は思つたよりは遠かつた。もう頂上かと頭を擡げる【もたげる】と、女体の絶巓【ぜってん　山の絶頂。いただき】、はまだ向ふの方に聳えてるのであつた。

男体に比すると、女体の頂上ははるかに神怪【しんかい　あやしいこと。不思議なこと】を極めたものであつた。

幾万層となく重なつた雲は、浅い小さな谷までも、幾千仞【「仞(じん)」は、両手を広げた長さ(「尋(ひろ)」)。高さ・深さを測る単位】の深谷のやうに思はせた。四望【しぼう　四方の眺望】たゞ雲の外眼に入るものとては無い。杖をつき立てゝ、屹と【きっと　状態や表情にゆるみのないさま。きりっと】巌壁の巓に立つて嘯い【うそぶい】た時、方に【まさに】海抜万尺の高岳にあるの思がした。

脚を遶り【めぐり】肩を掠め【かすめ】て雲が飛ぶ。駢び【ならび】立つた友との間をも縷々【るる　細く絶えず続くさま】として過ぎて行く。むく〳〵とむかぶし【向伏し　向こうの方に遠く低く伏したように見えるさま】上る白雲は、風に送られてあはや我等をも捲きこめて、天つ御空【みそら　空の美称】の国に将【ひきい】て行くかと疑はれる。

海の中か、地の底か、天の一隅か。混沌たる開闢【かいびゃく　天地の開けはじめ。世界のはじめ。「闢」も、ひらく】以前の世のさまか。巌頭に嶷立【ぎょくりつ　ひときわ高く聳え立つこと】して、静かにこの雄大極まる漠々の偉観絶観に対した心こそ、於戯【ああ　感嘆のことば】これ真に無我の真境であつた。「弁ぜんと欲してすでに言を忘る」(注2)陶淵明は千年も前に、我等の刹那の心情をいふた。実際、何といつて宜いか判らなかつた。

好画図【こうがと　好画題】！けれども神に非ずして誰かこれを描くべき霊管【れいかん　「管」は、筆】を有つ【もつ】て居やうぞ。絵ぢや無い。矢張、大自然だ。芸術を超脱した絶対的の力を有する景色だ。人間の智慧や、細工や、理窟や、是等の何を以てしても、冷やかき【ひややかき】科学の力では、此の中に包まれた神秘の扉を開くことが出来ないだらう。況んや。恋を歌ひ人生の倦怠をいふ所謂文士に於てをやだ。

二十有余人、恍【こう　我を忘れているさま　恍惚】として一語なし。這境【このきょう】斯時【このとき】、嗚呼、誰かこの大自然と黙契【もっけい　無言のうちに互いの意思が一致すること】するものぞ。

大声、山神の霊に告げて此処を去る。これから愈下り坂だ。

此の道には岩が多い。向ふに屹立して大巌石と、こちらの岩との間を、盛んに雲が飛ぶ、！下から上へ――紫雲石(注3)を過ぎ、出船入船(注3)を見た我等は、横面大黒【裏面大黒】(注3)に至つた。打見る所、大きな図う体を以て、雨風にさらして居るところには、福の神も宿りさうにも無し。面壁九年の野狐禅のやうだ。(注4)

石の多いのと滑るのとで草鞋が切れる。

高天原(注3)へは北先生が真先に上られた。外套を脱いで一同も続いて登る。ゾボンを穿いただけで、上体は素つぱだかになつて攀ぢ【よじ】上つたのは田口君だつた。平常さへも痛快な此の高天原は、雨と風と雲とによつて更に痛快を増した。北先生は千尋の底へと突き出した岩廻りをやられやうとしたが、一同して引留めた。けれども、その頂きのてつぺんで逆立ちをやつて退けられた。いつも乍ら先生の豪胆には恐れ入る。

裏の方から下りる。手も滑る。足もすべる。危いところだ。先に下りる友が、巌の間に猿を見たといふ。

弁慶七戻り(注3)を過ぎると、もう何も見るものはない。僕は一人先に駈け下りた。

男体山山頂の測候所と筑波山神社男体山本殿（上）
測候所正門入口（右）

(注1) **観測所**　ドイツで気象学を学んだ皇族の山階宮菊麿王が、1902［明治35］年に筑波山の男体山頂に「山階宮筑波山測候所」を開設し、日本初の山岳測候所となった。1908年、山階宮の死去により、翌年、国に寄贈され「中

央気象台附属筑波山測候所」となり、1928［昭和3］年には、鉄筋コンクリート造りの建物に改築された。以後、100年以上にわたり、我が国山岳気象観測の拠点としての役割を担ってきたが、アメダス（地域気象観測システム）観測地点の統廃合により、2001［平成13］年に閉鎖され、2006年、筑波大学が観測を継承した。

現在は「筑波山神社・筑波大学計算科学研究センター共同気象観測所」として使用されている。所在地・茨城県つくば市筑波1番地。

(注2)**「弁ぜんと欲してすでに言を忘る」**

陶淵明　連作五言詩「飲酒」其五

結廬在人境
（いおりをむすんで　じんきょうにあり）
而無車馬喧
（しかれどもなし　しゃばのかしましき）
問君何能爾
（きみにとう　なんぞよくしかるやと）
心遠地自偏
（こころとおければ　ちおのずからへんなり）
采菊東籬下
（きくをとる　とうりのもと）
悠然見南山
（ゆうぜんとして　なんざんをみる）
山気日夕佳
（さんき　にっせきによく）
飛鳥相与還
（ひちょう　あいともにかえる）
此中有真意
（このうちに　しんいあり）
欲弁已忘言
（べんぜんとほっして　すでにげんをわする）

(注3)**紫雲石・出船入船・横面大黒・高天原・弁慶七戻り**

つつじヶ丘から女体山頂への登山道に点在する巨石に付けられた名称

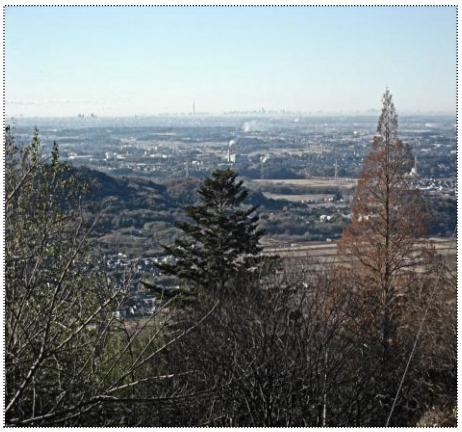
(注4)**打見る所、……面壁九年（めんぺきくねん）の野狐禅（やこぜん）のやうだ。**

高田は、横面大黒を、その名は、福徳や財宝を与える神である大黒天なのに、「福の神も宿りさうにも無し」と貶し、その後ろ姿は、岩窟内の壁に向かって9年間も修行を続けた達磨大師に似ているが、その実、まだ悟ってもいないのに、悟ったつもりになってうぬぼれている似非（えせ）禅僧のようだ、と皮肉っている。

六

十時に近い頃、一同は塚田屋といふ宿屋の二階に寛い【くつろい】だ。皆、まだ朝飯前だ。食膳の仕度の出来るまで、愉快に騒いだ。腕相撲膸【すね】相撲枕引、ぢやんけん、指名点呼。疲労の色を泛べ【うかべ】て居るものは一人もない。

十一時。二た間押し通しの広座敷に、ずらり居流れ【いながれ　身分の順序に長く並んで座る。居並ぶ。列座する】て朝飯を食ふ。空腹には、硬い酢章魚【すだこ　酢蛸】も甘露のやうだつた。



塚田屋跡からの眺望　空気が澄んだ日には富士山や東京スカイツリーも望める

こゝの二階はすてきに展望の利くところだつた、丁度、此のときから雲が収つて、日の光が射した。麓の方には、白い雲に大きな破れ目が出来て、黄色い水田が現はれた。築山位な所々の丘山も見える。元気のいゝ一行は、再び登山して、霽色一新【せいしょくいっしん　「霽」は、雨・雪がやむ。雲・霧がなくなる。雨上がり。雨が上がって、景色が全く新しくなること】の眺めを恣にしやうと威気張つたが、時間が許さぬので、口惜しがつて居た。

二階から見下した筑波の町は柿の木が多かつた。「一つ喰ひたし」(注5)。といふ言葉が一行の間に流行つた。

雨に濡れた脚絆をつけて、塚田屋を出たのが十一時半ば過ぎ。

(注5)**「一つ喰ひたし」**

正岡子規の俳句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」からの連想か。生涯に20万を超える句を詠んだ子規の作品のうち、最も有名なものであり、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」と並んで、俳句の"代名詞"として知られている。初出は『海南新聞』1895［明治28］年11月8日号。

七

コスモスの花の多い小田の駅(注6)は長かつた。

疲れた足を引きずつて、【真鍋】八坂神社の森陰に、吾が校舎の高い塔を見たときには、もうこつちの物だといふ安心をしない訳には行かなかつた。

振り返ると、筑波の紫は、僕等を見送りながら、高く蒼穹を摩して聳えて居る。

(注6)**小田の駅**

「駅」は、宿駅の意。交通の要地にあって、人馬継立（つぎたて）や宿泊を主な業務とした交通集落。宿場。

旧筑波郡小田村は、1889［明治22］年4月1日、町村制の施行に伴い、小田村・北太田村・小和田村・山口村・平沢村・下大島村・大形村が合併して発足した。

小田村のあった筑波山南麓の地には、奈良時代から平安時代に掛けては、「平沢」に常陸国筑波郡の郡衙が置かれ（現在、その一部が「平沢官衙遺跡」として、国の史跡に指定されている）、鎌倉時代から戦国時代に掛けては、常陸国南部で最大の勢力を誇った小田氏が、居城（城趾は国史跡。「小田城趾公園」として整備が進んでいる）を構えていた。南北朝時代になると、小田城は南朝方の関東における拠点となった。

南朝方の重鎮の一人であった北畠親房は、海路、奥州へ向かう途中遭難したが、常陸国東条荘（現稲敷市）に漂着し、神宮寺城・阿波崎城（いずれも、現稲敷市）を経て小田治久に迎えられ小田城に入った。1338［暦応元］年のことであり、以後、1340年まで、小田城にあって、東国における南朝方の中心として奮闘した。その間、天皇家による治世の正当性をうたった『神皇正統記』と、朝廷政治の根幹に関わる官職制度の沿革を述べた『職原抄』とを著した。

江戸時代には土浦藩領となり、石門心学が普及した。1793［寛政5］年に、江戸圭明舎の北条玄養が、土浦城下と小田村で教えを説き、翌年には心学講舎「尽心舎」が成立した。この小田村に1781［天明元］年に生まれた長島尉信（やすのぶ）は、講舎の運営にも尽力したが、農政学者として、『おだまき』『不算得失』『田法大意』『邑正便覧』などを著し、水戸藩や土浦藩の招きを受け、検地・測量に大きな貢献をした。

1908［明治41］年には、小泉眷によって、「小田国民学校」という私立学校が設立された。小泉は、1874［明治7］年、小田村に生まれ、東京専門学校（現早稲田大学）に学んだ後、1899［明治32］年から土浦中学校で教鞭を執っていたが、1906年に、県が財政逼迫による教員整理を行おうとした時に、自ら進んで退職した。

退職後、小泉は、郷里の小田村において、自分の教育理念に基づく中等教育を実践しようとして、「小田国民学校」の設立準備を始め、1908年に開校式を挙行した。石川重房先生が学校長に就任し、小泉は主幹という立場で学校経営に当たる一方、自らも教鞭を執った。3年間のうちに当時の県立中学校と同じ教科を教え、さらに簿記や農業関係の科目をも教えることとした。そのため、生徒数は、小田村を中心にして、田土部・栗原・藤沢・山の荘など10㎞くらいの範囲から、多い時で300～400名に及んだという。しかし、公的な資格が取得できないため、生徒数が漸減し、1913［大正2］年には閉校の止むなきに至った。

小泉は、小田国民学校閉校後、1914年に小田村長に就任し、1942［昭和17］年まで在職した。大正から昭和に掛けての「小田尋常高等小学校」でも、特色ある教育が実践されていくが、教員の努力とともに、小泉村長の手腕に負うところも大きかった。

八

以上は僕等の筑波行の概略だ。たゞ、廻らぬ筆の、楽しくも亦豪壮だつた其の時の状の、百分の一をも写し得ぬのを憾み【うらみ】とする。

五軒茶屋に寝た晩は実際愉快だつた。僕等大に浩然の気を養ふべき必要あるものは、時にこんな事を企てるのは最も宜いことゝ思ふ。

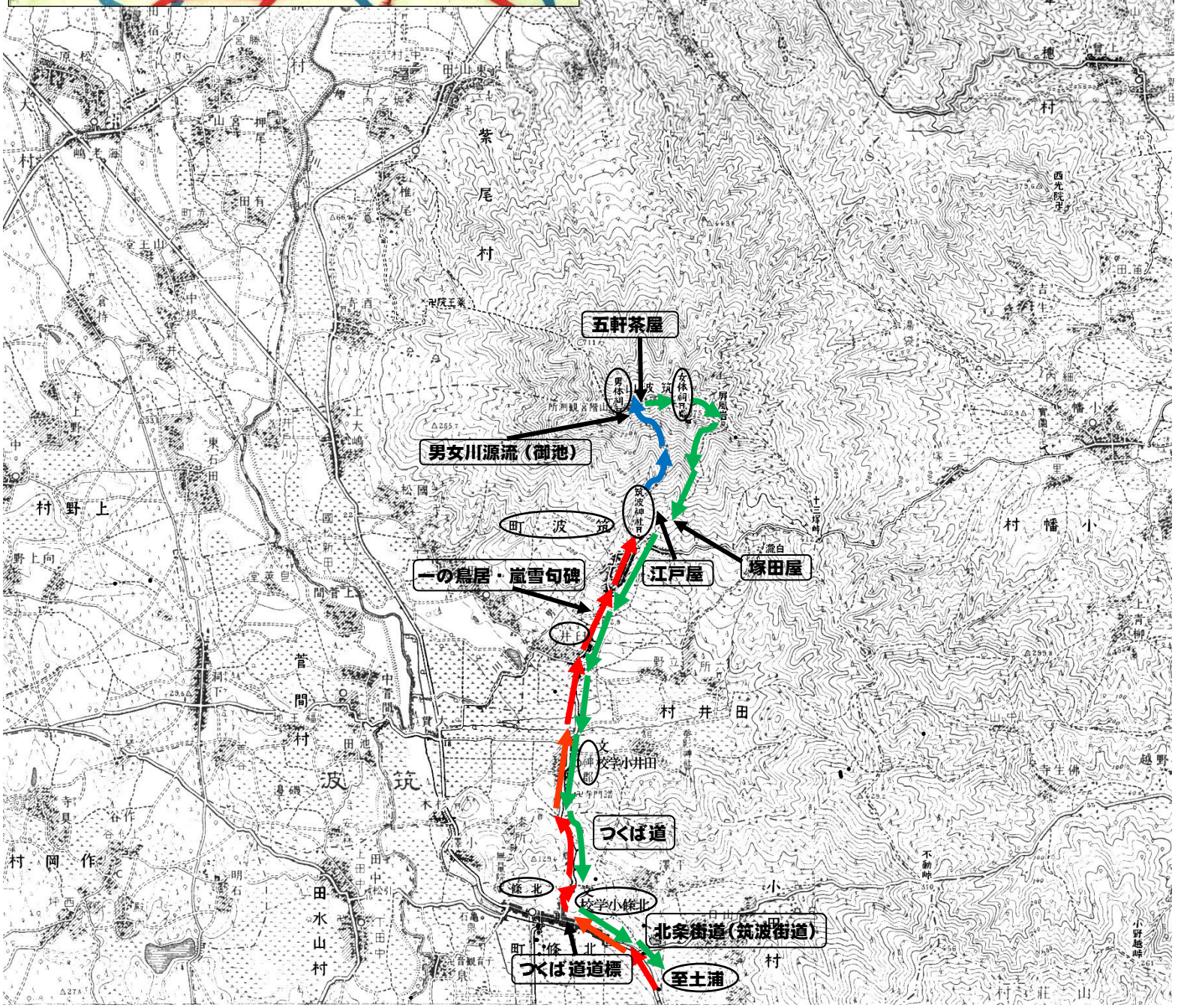
僕等は遂に成功したのだ。此の拙い文【文章】の中からでもこの一行の意気といふものを汲んで貰へれば大に本望だ。

（北条の尋常小学校と、提灯の稲葉君と、依雲亭の主との親切を感謝して置く【筆を擱く】。）

（高21回　松井泰寿）

アカンサス 172・173・174号
筑波山登山コース

筑波山塊地図

（明治 44 年発行　一部修正）

筑波山名所絵図（下）